

世界史 問題 I

下の図は、近代中国などをモデルにした手塚治虫の漫画『一輝まんだら』の一ページである。この状況が描かれる歴史的背景とその後の経過を、漫画の人物たちのセリフも参考にしながら、以下の語句をすべて用いて、350 字以内で述べなさい。(語句の順序は自由に変えてよい、語句には下線を引くこと)

日清戦争 扶清滅洋 アヘン戦争 北京議定書(辛丑和約) 植民地



世界史 問題Ⅱ

次の文章をよく読んで、下記の問に答えなさい。

初代ローマ皇帝アウグストゥス(オクタウィアヌス)は、共和政末期の政治家カエサル^①の養子で、養父亡き後、(a)朝の女王クレオパトラとアントニウスの連合軍をアクティウムの海戦で打ち破った。この勝利により、一世紀にわたって続いた内乱の時代は終わりを迎える。そして、アウグストゥスは元老院の第一人者と自称したことから、新しい政治体制(b)が始まる。

アウグストゥスの時代には、多くの優れたラテン文学作品が著された。なかでも有名なのは、『イリアス』、『オデュッセイア』といった叙事詩の韻律を引継ぎ、英雄叙事詩をラテン語で書いたウェルギリウスの『(c)』で、この作品はラテン文学の金字塔として名高い。また、後2世紀の史料によると、アウグストゥスは「ローマを煉瓦造りの都市として引継ぎ、大理石の都市として残し」、政治・経済・文化の中心となる広場である(d)、神殿、図書館、劇場などの公共建造物の建造にも尽力したとされる。

しかし、後64年の(e)帝の時代に発生したローマ大火により都市の大部分が焼失してしまい、皇帝は焼失した場所の中でも(d)にほど近い場所に豪華絢爛な黄金宮殿や人工池・森などを建設・造成した。しかし、この建設事業は当時の人々に快く受け入れられなかったようで、(e)帝亡き後、この人工池のあった場所にウェスパシアヌス帝と^②ティトゥス帝が剣闘士競技を行う円形闘技場(f)を建設した。

ところで、(e)帝の時代、^③使徒ペテロやパウロらによってキリスト教の教えは都市ローマでも広がりを見せる。しかし、彼らは^④迫害を受け殉教し、その後もキリスト教徒に対する迫害は続いたが信者の数は増え続け、313年に^⑤ミラノ勅令でキリスト教は公認され、325年には^⑥教義統一が図られた。そして、392年にテオドシウス帝がキリスト教以外の宗教を禁じたことを受け、キリスト教はローマ帝国の国教となるに至った。

問 1 空欄(a)～(f)を埋めなさい。

問 2 下線部①の人物は前 44 年にブルトゥスらによって暗殺される。彼が暗殺された背景を当時の政治体制にも言及しながら簡潔に説明しなさい。

問 3 下線部②の皇帝の時代にイタリア半島のカンパニア地方にあるヴェスヴィオ山が噴火した。この噴火で罹災した都市はどこか、一つ答えなさい。

問 4 下線部③の人物が埋葬されている地に立っているサン＝ピエトロ大聖堂を総本山とするキリスト教の教会組織の名前を答えなさい。

問 5 下線部④と関連して、4 世紀初頭にキリスト教徒が迫害を受けたのはなぜなのか、説明しなさい。

問 6 下線部⑤のミラノ勅令でキリスト教を公認した皇帝は誰か、答えなさい。また、この皇帝が 330 年に新たに建設した首都の、現在の都市名を答えなさい。

問 7 下線部⑥について、教義を統一するために行われたのは何か、また正統とされた宗派は何か答えなさい。

世界史 問題Ⅲ

次の文章をよく読んで、下記の問に答えなさい。(引用文には、省略したり、書き改めたりしたところもある。)

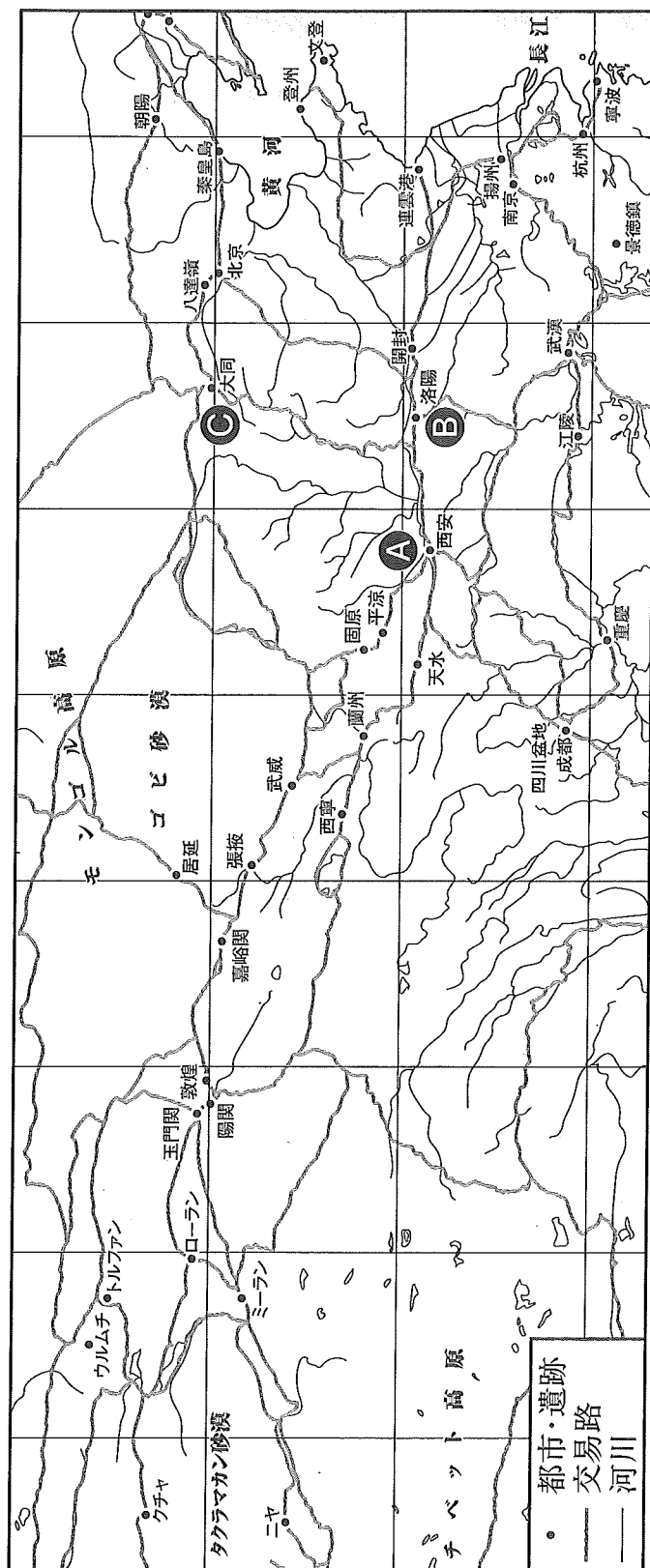
中国三大仏教石窟のうち、雲崗石窟の開削^{かいさく}と造像は[a]王朝、竜門石窟の場合は[a]王朝及び唐の高宗・則天武后と関係していたが、敦煌石窟の開削はこのような王朝権力とは関係していない。河西回廊の西北端に位置するオアシス都市の敦煌(甘粛省敦煌市)は、東アジアと中央アジアとを結ぶシルクロード上の要地であるとともに、モンゴル高原と中央アジア・チベットとを結び、さらにインドに至る南北ルート^①の結節点でもあった。中国では隋唐以前の伝存絵画に乏しく、敦煌莫高窟の壁画は中国絵画史の史料としても貴重である。

敦煌は前漢の武帝(在位 前 141 ～前 87 年)の時に中国の勢力下に入ったが、莫高窟^①は 366 年に僧侶^{らくそん}の楽僔^{らくしん}によって開削が始められた。現存最古の窟は五胡十六国時代^②末の北涼期(5 世紀前半)の第 275 窟等の 7 窟と認められ、それ以前^③のものは後世の造窟によって壊されてなくなったと考えられる。隋から唐にかけてが造窟の最盛期で、隋窟は約 80、初唐窟約 40、盛唐窟約 80 と数えられ、塑像や壁画の優品を持つ石窟が多数作られた。

敦煌は 786 年頃から吐蕃^{とばん}に占領され、大中二(848)年に漢人豪族の張議潮が挙兵するまで 60 年間吐蕃占領期が続いたが、造窟はこの間^④も続けられた。その後 10 世紀の曹氏帰義軍時代、さらに 11 世紀初めにタンゲートによって建国された[b]の時^{かん}まで造窟は続けられたが、元代以降急激に衰微したものと考えられる。

(金子修一「敦煌石窟」『世界史史料』3 東アジア・内陸アジア・東南アジア I,

岩波書店, 2009 年, 228-230 ページ)



地図

(シルクロード研究論集 第1巻『仏教東漸の道 インド・中央アジア篇』

東洋哲学研究所, 2023年, 付図をもとに作成)

問 1 文中の雲崗石窟と竜門石窟の位置を，地図の①～③から選びなさい。

問 2 文中の a と b を埋めなさい。

問 3 a 王朝において仏教は庇護され，石窟寺院の造営が盛んに行われたが，一時的に弾圧されることもあった。道教に帰依し，仏教を迫害した皇帝と，その皇帝のもとで道教を大成したとされる道士の名を答えなさい。

問 4 下線部①について，武帝は敦煌など河西地域のまちに 4 郡を置いて，西域支配の拠点とした。武帝が西域に関する情報を得た経緯について，80 字以内で説明しなさい。

問 5 下線部②の時代には西域出身の仏教僧侶が活躍した。後秦の都長安に迎えられ，大乘經典の漢訳を精力的に行った^{クチャ}亀茲出身の仏教僧侶の名を答えなさい。

問 6 下線部③に関連して，唐の初めに長安を出発し，中央アジアを経由してインドに向かった仏教僧侶の名と，帰国後に著した旅行記の名を答えなさい。

問 7 下線部③に関連して，唐が勢力範囲を拡大した 7 世紀には西方の宗教が長安に伝えられた。そのうちの一つはマニ教だが，創始者であるマニが生まれた時代と地域，後にマニ教を受け入れた騎馬遊牧民について 80 字以内で説明しなさい。

問 8 下線部④について，7 世紀初めにチベット高原を統一し，吐蕃を建国した王の名を答えなさい。

世界史 問題Ⅳ

次の文章をよく読んで、下記の問に答えなさい。

12世紀までの西欧では、ほとんどの人間の生活は、所領、村落、街区、教区といった規模の共同体の中で完結していた。しかし支配階層については、より広い領域での政治的組織化がすでに問題となっていた。中世末期になれば、広域統治権力の作用は、一般の民衆の日常生活にも否応なく及んでいくことになる。

広域統治と政治的共同性の枠組みとして代表的なものは、王国である。大陸ではカロリング帝国解体後の9、10世紀に曲折を経て東フランク、西フランク、イタリア、ブルグントの四王国並立の体制が定着した。それまでの王国分割の反復を考えるならばこの安定は新しい事態であり、それ自体説明を要する。これはおそらく、シャルルマーニュの皇帝戴冠^①に始まるローマ帝権観念のフランク的な王権観念への影響という角度から説明することができよう。各王国の王たちは、自らを帝権を担うにふさわしい者と見なし、王権に帝権類似の性格を与えたのである。イングランドを統一したウェセックス王権^②も、カロリング帝権をモデルとして自らを形作ったために、王国分割は行わなかった。〔中略〕

よく知られているように、ドイツでは13世紀から選挙王政が定着した。その原因は王朝の偶然の断絶や未成年の嗣子のみが残される事態がしばしば生じたこと、またドイツ王権が帝権を担ったことに求められる。グレゴリウス改革以降の教皇権は選挙を皇帝指名の前提としたし、皇帝の側でも、教会を介さない神との直属性を主張する時には諸侯の選挙をその前提としたのである。これに対してフランスではユグ・カペー^③以降14世紀の初めまでカペー朝が直系の嗣子を欠くことはなかった。諸侯たちは半ば習慣によってこれらの嗣子の即位を受け入れた。しかもその間にカペー朝は自らをカロリング朝の血統の継承者に擬するプロパガンダを成功裡に展開した。さらにルイ9世^④の列聖の後では、この王の血を引くことがフランスの王位に登る必須条件となったといえる。^⑤1328年のカペー朝断絶に際してエドワード3世の請求を退けたのは諸侯たちの政治的判断によるものであるが、このことを先例としてフランスの王位継承序列は確定した。イングランドでは王位をめぐる内戦^⑥がよりしばしば見られた

が、対立候補たちは互いに先の王との血統的繋がりや相続権を主張しており、世襲王政が基本である。〔中略〕

次に、王権の活動に対する国内の世俗領主、教会、都市といった勢力の反応が問題になる。そのなかでは、王権との関わりを最小限にとどめて地域で割拠する傾向、なんらかの合議制度を通じて王国の運営に積極的に参加する傾向、王権に依存してさまざまな利権を得ようとする傾向などを判別できよう。一般に 11, 12 世紀ではフランス、イングランド、ドイツにおいては大領主層の割拠傾向が強く、合議を通じて王政に関与するのは、王権によって選択された少数の聖俗の人間集団のみであった。これ^⑦に対し 13 世紀以降には世俗領主、聖職者、都市といった諸身分を含む大規模な合議制度が発達し、王権を規制するにせよそれに協力するにせよ、広汎な共同行動がとられるようになった。またこのような合議を通じて、共同体としての王国、あるいは王国独自の法慣行や政治伝統という観念が意識されるようになる。しかし 14, 15 世紀のイギリス、フランスでは世俗領主たちの王権への依存が高まり、有力貴族をリーダーとして王権の統制を狙う諸党派の抗争も激しくなる。

（『岩波講座 世界歴史 8 ヨーロッパの成長 11－15 世紀』岩波書店，1998 年，
50－53 ページ，一部改）

問 1 下線部①に関連して、800 年にシャルルマーニュ(カール大帝)に帝冠を授けたローマ教皇は誰か、答えなさい。

問 2 下線部②に関連して、このときのウェセックス王は誰か、答えなさい。

問 3 下線部③に関連して、この人物が即位したのは西暦何年か、答えなさい。

問 4 下線部④に関連して、a)この人物が遠征を行なった南フランスで、当時広まっていた異端の名称を答えなさい。また、b)この異端信仰の特徴を 2 つ挙げなさい。

問 5 下線部⑤に関連して、a)カペー朝の後を継いでフランスを支配することになった王朝名、b)そしてこの王朝(= a)がその期間に滅びることになった戦争の名称を答えなさい。

問 6 下線部⑥に関連して、そうした内戦の一つであるバラ戦争において対立した2つの家系を答えなさい。

問 7 下線部⑦に関連して、イギリスの二院制議会の特徴を、フランスの三部会と比較しつつ、とりわけその構成員に着目しながら説明しなさい。